

---

# 月の水

山内 詠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月の水

### 【Nコード】

N9150U

### 【作者名】

山内 詠

### 【あらすじ】

全てを失って身を墮とした小国の姫。静かに生きていた彼女を探しだしたのは、全てを手に入れた大国の反逆者だった。作者の好きな設定を盛り込みまくった習作です。中編の予定。一部ブログでも公開しております。

## 再会（前書き）

直接的な性描写はありませんが、連想させるものがあります。ご注意ください。

## 再会

茫然とする私を他所に、男は部屋に入るなり当たり前のように言い放った。

迎えに来た、と。

突然何を言うのか。

一瞬どうにもならない怒りが私の心を春の嵐のように乱したけれど、ひとつ大きく息を吐くことで、私は激情と折り合いをつける術を既に身につけてしまっている。

どうにもならないことは、どうにもならない。

それにしても男はここをどこだと思っているのだろう。

獣脂でできた独特の匂いを放つ蠟燭が照らす室内は、お世辞にも綺麗とはいえない。一応片付いてはいるけれど、みすばらしくどこもかしこもが痛み、壊れ、擦り切れていて、薄暗さでそれを誤魔化している、そんな部屋だ。

大して広くもない部屋のほとんどを占領するのはベッドでこれも触れただけで軋むような代物。それ以外にあるのはベッドの脇に申し訳程度にあるテーブル。その上にはこれまたヒビの入った水差しとコップ、安物の葡萄酒が申し訳程度に入った瓶、それだけ。

何もないといってもいい部屋だろう。何しろ必要が無いから。

「連れ出しをお望みなら私ではなくて女将に言っただけですか」

わざと男に背を向けて、そっけなく言った。

部屋まで来たのなら、既に金は払ってあるはず。

つまり男はここはどこで私がどういう立場にいるか最初から知っているのだ。私は連れ出しの客は断っているので、男には別の女があてがわれるはず。

しかし男は呆れたように鼻を鳴らした。

「お前は相変わらず阿呆だな」

その言葉で他人の空似というほんのわずかな可能性すら消えた。男はいつも私のことを馬鹿にしていた。軽蔑していた。

古いベッドが容易く軋むように、私の心はあつという間に昔のようになり引き絞られる。

男の眼差しが怖くて、言葉が痛くて。だけど近くにいたかった、その姿から目を離せなかった、あの頃のように。

私はこの場所を、今の立場を捨てられない。色んな過ちや問題が私を縛り付けているから。

手に職も持たず、平凡な容姿の女盛りをとくに過ぎた私に出来る仕事は限られているから。

「……お客様は人違いをなさっているようですわ」

これ以上男と一緒にいるのはまずい。

でも部屋から出たくても入口はひとつ、しかも男の背後にある。

私は覚悟を決めて振り返った。

「では女将に伝えてまいります。少々お待ち下さいませ」

につこりとほほ笑んだつもりだったけど、上手くできていたのだろうか。成り行きまかせでならざるを得なかったこの仕事で習得した数少ない技術の一つだったのだけれど。

男の顔はまだ軽蔑の色を浮かべていて、だから私は、男の瞳だけは見る事ができなかった。

それが間違いだっただのかもしれない。

横をすり抜けようとしたその時、がっちりと手首を掴まれた。

「……お前は、本当に阿呆だ」

そんなことは男に言われなくてもわかっている。愚図で、馬鹿で、呆れるくらい何もできない女。それが私。

だから売春宿で娼婦（こんばしよ）をしているのだ。他に出来る事があまりにも、無さ過ぎて。

生まれも育ちも全く関係ない、ただ女というだけでなれる職業。

ねえ、足首がはつきりと見えるくらい短いスカートと下ろした髪でわかるでしょう？

濃い化粧とむせそうになる香水でわかってしまうでしょう？

私がどういう女になってしまったか。

男は私を軽蔑していた。

ただいつもいつも、馬鹿にしたように、嘲笑うだけで、何一つ優しい言葉はくれなかった。

だから私も言わない。男が私にそうしたように。

あなたは私の知らないひと。私はあなたの知らないひと。それでいいじゃない。

「手を離して頂けませんか」

掴まれた手首が、痛い。何も力の限り握らなくても、男の力に女が敵うはずないのに。

「探した」

ため息を吐くように、男は言った。

「探して、探して……こんな所に居やがった」

そのまま引きずられるように、部屋から連れ出されそうになる。  
冗談じゃない。

仕方が無かったとはいえ、私は、私の意思でここにいるんだ。今更、本当に今更、何をしようとしているの。

「離してください」

「断る」

「離して！」

振りほどこうとしてもがっしりと掴んだ手はびくともしない。男はまた鼻を鳴らした。

「誰が、離すか。俺がどれほど探したと思っている？」

そんなのは男の都合だ。私には関係ない。

「だから人違いですって！」

「俺がお前を見間違えるものか！」

その言葉を聞いたのが、今でよかった。

あの時だったら、何も失う前の、私だったら。  
一体どうしてしまっただろう。

考えるまでもない。何もかもを捨てて、男に縋りついただろう。  
故郷も、そこに暮らす民も、両親も、何もかも。  
それほどまでに、昔の私は恋焦がれていた。  
今、目の前にいる男に。



## 理由

私と男の間に何かあったかと言われれば、無かったとしか言えない。

故郷は国というよりも少し大きい都市と呼ぶ方がしっくりくる、小さな小さな国だった。

大国の傘の下で、辛うじて自治が認められているようなそんなちっぽけな、国。

その国の王の3番目の子供として生まれた、それが私。

10歳の時に大国の首都へと留学することになった。

それは生まれる前から決まっていたことで、もちろん留学など名ばかり。

女として生まれた時から、しかるべき年齢になった時大国の王へ嫁ぐことも決まっていた。これももちろん正妃などではなく、妾として。

体裁を取り繕うためだけに通わされた貴族や王族の子弟が通う学校で、男に出会った。

男は大国の王弟の子だった。

だから最初、私は男個人ではなく、遠くない未来に仕えることになるであろう王の影を追っていたように思う。甥と伯父なら似通う部分もあるだろうと思って。

大国の王族は皆黒い髪と黒い瞳をもっていて、男も例外じゃなかったから。

ただの興味が、いつしか恋になったのがいつだったかはもうわからない。

知らないうちに私は男を好きになっていた。まるで正体不明の熱病

にやられてしまったように。

姿を見ることができれば嬉しくて、すれ違ふことができたなら胸が張り裂けそうになって。

あんまり見つめていたからだろう。

男とよく目が合うようになった頃から、男は私を軽んじ嘲り始めた。

男とその周辺の者たちは私を虫けら扱いした。大国に寄生する小国の虫だと。

確かに私の故郷はみつともないのだろう。ちつぽけな国を守るために大国に媚びへつらっていた。

……圧倒的な国力の差に、武力以外で身を守る術は最も屈辱的な方法しかなかったのだから仕方が無い。

だけどそれを口にすることは、許されない。

どんなに罵られても酷い扱いを受けても、耐えなくてはならなかった。

人質とはそういうものだ。

そしてどうしたものか私の気持ちは男から離れなかった。

心だけは自由。

ただそれだけを、ずっとずっと支えにしていた。

心の中でだけ、男は私に優しく愛を囁いて、大切にしてくれる。私の望みは心の中では叶えられた。それだけでよかった。

私にとって現実は自分の意思とは無関係に展開していくものだったから。

近い未来、私は男を見ることすら許されなくなる。

だから、限られた期間の中だけでも、近くにいたかった。馬鹿だと自分でもわかっていた。

15歳になった時、後宮へと上がるように告げられた。花嫁衣装も神への誓いも何も無く、ただ住む場所を王宮の外れから後宮の一室へと変えただけ。

夫となった大国の王は父親と変わらない年齢の神経質そうな白髪混じりの線の細い人だった。

義理で1度身体を合わせただけで、見向きもされなくなった。人質としてやってきた小国の王女には似合いの扱い。

王が死ぬまで後宮で暮らし、その後はどこかの修道院に入るんだろうとずっと思っていた。

生まれた時からずっと決められた道を、私はひとりで歩いていた。しかし未来は誰にもわからないということを、私に教えたのは他の誰もない。

どうしようもないほどに恋焦がれた男、だった。

私が後宮に上がって10年が過ぎた頃、反乱が起きたのである。

血と剣によって国王が廃され、王弟が玉座に着いた。その先導をしたのは、王弟の子である男。

力によって支配してきた者は、より力のある者に支配されるのは自然の道理。しかしその後とんでもない混乱が待っていたことまで、男は知っていたのだろうか。

反乱は王宮の中だけにとどまらず、今まで傘下で大人しくしていた国々にまで瞬く間に広がっていったのだ。

結果王宮どころか国すべてが戦場となり、巻き込まれた私の故郷は灰になった。

帰るべき故郷を失い、王の支配という名の庇護も失った私のようなただの妾は途方に暮れるしかなかった。

その後売春宿に辿りつくまでの道のりは、まあよくある話なんだろう

う。

色んな人に騙され、奪われ、傷つけられたりしながら、結局、同じような立場の女がごろごろいる場所に落ち着いたってわけだ。

本当ならば夫ただひとりだけに見せる女の全てを色んな男に切り売りすることについて、自分でも不思議なくらい抵抗が無かった。

それしか売るものがなかった、それだけじゃない。私にとって男というのは恋焦がれたただ一人であって、それ以外はどうでもよかつたんだと思う。

馬鹿で愚かで呆れるくらいにありふれた私の身の上話。

信仰心なんてとうの昔に無くなってしまっではいたけれど、五体満足で一応病気も無いということだけは、神に感謝しなくてはならないだろう。

これまたありふれた話で、身体を壊して死んでいく女たちは本当にたくさんいたから。

首都へと向かう街道沿いの宿には、色んな旅人が客としてやってきた。

そこでは男の話を、漏れ聞くことができた。

王の息子として、今最も玉座に近い場所にいるという。

内外の戦で疲弊しきっていたが、まだ国が大国と呼ばれる姿を保っているのは、王の息子の手腕によるところが大きいと。

男はいつかこの大国の王になる。

全く有り得ないただの妄想だったけれど、その妄想が私の心の糧だった。

もしも、もしも私を妾にするはずの王が、男だったら。

私の身体を好き放題にするのが客ではなくて、男だったら。

暗闇に囚われた私を救う唯一の光。

だけど、現実には男が目の前に現れて、さらに私を探していたという。

どうして？

なんで？

よりもよって、なぜ、今なの？

## 唯一

こうして二人きりで会ったのは、もう10年以上も昔。

それだって、会うというよりは遭遇した、というのが正しいくらい。言葉さえ交わさなかった。ただ一瞬視線が絡んだ、それだけだった。

そんな最後の時は、まだ互いに10代の子供だった。

私の知らない間、男は年月を正しく糧として充実した日々を過ごしたのだろう。

青さがそぎ落とされた身体と顔に表れているのはこねれた男性の色気と冷酷さであり、支配する立場の者だけがもつ静かな傲慢を漂わせていた。

対する私はどうだ。

頭の前からつま先までどつぷりと後ろ暗い世界に浸かっているとはつきりわかる容貌は擦り切れた服と同じように荒み男にふさわしい淑女からは遠く離れている。

だから私は驚愕してもいた。

男は見間違えるはずが無いと言っただけで、今の私に昔の面影などかけらもないのだ。

「行くぞ。こんなところに長居したくない」

ぐい、と男に腕をひかれたけれど、ぐつと踏ん張ってそれに抵抗する。

私の態度が気に食わないのか、男は舌打ちした。

そつ、ここはこんなところ。真つ当な女は決して近づかない場所。

玉座に一番近いとまで言われる人物が、似合う場所では、ない。

「離してください」

自分でも驚くぐらい冷たい声が出た。

「お客様が探している者はもうこの世にはいません」

間違っていない。あのちっぽけな国の虫けら王女はもうこの世界のどこにもいない。

ここにいるのは年増の娼婦ただひとり。

「  
」

ずっとずっと昔に失った名前と呼ばれても、もう、いないのだから心など動かない。

私はそんな名前ではない、と返すと、男の腕から力が抜けた。

「お前は俺を、忘れたのか」

忘れるはずがない。忘れようがない。

たったひとり、男だけが私の特別だった。

心の中で、夢の中で、男は私に愛していると囁く。抱きしめて、頬を撫でて、微笑んでくれる。

だけど、それは幸福な想像の産物。ただの妄想。

心の中でだけは男は切なくなるくらい優しい。もちろん私だって王女という身分のままで、互いに慈しみ、愛し合っている。

過酷で非道な現実が妄想を私だけに価値がある宝石に磨きあげた。

だから、拒む。

男は私の特別だから。

男が穢れた虫けらの女を受け入れることなど、考えられないから。

男が求めるのは、失う前の、汚れてごみ屑みたいになる前の、私のはずだから。

私はもう狂っているのかもしれない。

現実と虚構の境目がわからなくなっているのかもしれない。

だって、男が私を迎えに来るはずなんて無いのだから。

ようやく腕が解放されたから、私は男の脇をすり抜けるようにして扉に手をかけた。

そのまま部屋の外へ出てしまえばいい。だけど、私は躊躇ってしまった。

だって、掴まれていた腕はまだ痛い。ならば、これは、現実なのかもしれないと思ってしまった。

「……替わりの女を、呼んで参ります」

本当にこれが最後のつもりで、振り向かないまま男に声をかけた。だけでも返ってきたのは、了承の言葉ではなく、激情のままに発せられた叫びだった。

「お前の替わりなど、いるものか！」

背中も、腕も、身体ごと全部包まれるように抱きしめられる。苦しい程の、力で。

耳元に男の吐息を感じて、私は目を閉じる。

心の中では、何回、何百回と繰り返し返された男の抱擁。



これは現実？ 私は、夢を見ているのでは、ないの？

「俺は、子供過ぎた」

男は自分のことなのに、汚いものを吐き捨てるように言い放った。始まりは思いだせないと言男は言う。何時からか、どうしてかわからないと。

ただ属国から人質としてやってきた王女の視線を感じるたびに、心が高揚するということを知った。

いつの間にか自分も同じように王女を見つめるようになった。

「それが恋だと気付いたのは王女が伯父である王の妾になると知った時だったよ」

好きになってはいけない、立場が違う。わかっていた。最初はそう、思っていた。

好きになるはずが無い、属国の王女など、王の妾など。

自覚した時、愛しい気持ちは憎しみと軽蔑に変わった。

手に入らないならば、意味などない。他人のものになってしまいうなら、もうどうでもいい。

行動が間違いだと言付いたのは王女が王の妾になるために自分の前から姿を消してからだ。

欲しいものがどこにあって、誰のものかはっきりとわかるのに、どうやって手に入らない。

触れることなんてできない、目にするこす許されない。

やがて愚かで幼く残酷な過去の自分の行いが改めて自分を苦しめるようになった。

だから

だから奪うことにした。

替わりなど、どこにもいない。あれは唯一無二で、自分のもの。王の冠など、地位などいらない。

欲しいものは、後宮の片隅にひっそりと生きる一人の妾だけ。

そのために王弟であつた父親を唆し、反逆者の旗印に仕立て上げた。

「……嘘」

男の言葉が本当ならば、男は、私を得るためだけに血の繋がった伯父を殺したことになる。

そしてこの大国に滅亡の恐怖を感じさせたことになる。

今も燦ぶる戦の火を熾したことになる。

吟遊詩人も裸足で逃げ出してしまうような、夢物語。

「嘘ならどんなによかっただろうな」

男は自虐を含ませながら喉の奥で嘲笑った。

## 愚か

男はそれこそ血眼になって私を捜し回ったという。

私の名目上の夫であった王が死んだ後、国中に広がる混乱はもちろん後宮もめちゃくちゃにした。

元々後宮からは王が退位しない限り出ることは許されない。

王の後宮は私のような人質の妾ばかりが集められていたから、多くの妾姫たちはこれ幸いと自国へ逃げかえろうとした。

しかし長い間世間から隔離されていた籠の鳥が行動を起こそうとする頃には、まともに身動きが取れる状況ではなくなっていたのだ。

ある者は自害し、ある者は殺され、ある者は戦火に焼かれた。運が味方した者だけが生まれ故郷の国へと帰ることができたという。しかしようやく帰った故郷が滅んでしまった者も多くいた。

誰もが右も左も善も悪もわからない争いの最中、私は混乱に乗じて罪を犯す者に絡みとられ、命以外の全てを失った。そのせいで私の足取りは後宮を出たところからぶつとりと途切れてしまったのだらう。

この売春宿に辿りつくまでいくつもの宿を転々としたせいもあるのかもしれない。

「……探した。ずっと探していた」

私を抱きしめる力は緩むどころか一層強くなった。

「やっと、見つけた」

吐息が耳に、うなじに、男の熱を伝える。

「もう離すものか」

この感情が偽りであつたなら、簡単に忘れることのできるものであつたなら、一体どんな未来が待っていただろう。

少なくとも多くの国が戦を回避することができたであろうし、私は後宮の片隅で王の死を待ち、男は王の甥としてごく当たり前の生活を送っていたはずだ。

ただ、あの時。

最後に会つたあの時に秘めていた素直な気持ちを口に出来ていれば、誰も何も巻き込むことなく私たちはこのどうしようもない恋を諦められたかもしれない。

それともあの時にお互い何もかもを捨て去れば、もしかしたら、結ばれていたのかもしれない。

だけどそれは所詮後になつてからならいくらでも考えることのできる仮定の話でしかなかった。

思いが通じあう未来を、私たちはあの時望んでいなかったのだから。

私と男がしたことは、不治の病をただの風邪だと放置し結果、国中に蔓延させたのと同じだ。

なんという、愚拳。

なんという、醜悪。

男の腕にこめられた力は、慰めの妄想でもなく幻でもなく、身動きを許さぬほどの強さで私を捕えて離さない。

でも私はこの腕を、振り払わなくてはならない。

何もかもを巻き込み傷つける権利など、資格など、私には無いのだから。

「……お放し下さい。私などに触れては穢れます」

もう数なんて覚えていないくらい娼婦としての客の相手をしてきた。男に似合うのは、私のような存在ではない。もう、こんな虫けらのことなど、忘れて。

「お前は、本当に阿呆だな」

男は呆れたようにため息を吐いた。  
お前がどんな者でも、どんな姿でも。

「俺はこの魂が尽きぬ限り、お前を探して、求め続ける」

ぐい、と顎を掴まれ、男と目が合った。

ああ、この瞳。これだけは、変わらない。  
恋焦がれた、あの時の、まま。

「諦める。お前の全ては、もう俺のものだ」

支配者の微笑みをのせた男の唇は、当たり前のように震える私の唇を塞いだ。

ああ、本当に私は呆れるくらい愚かで、馬鹿で、どうしようもない。そして男も、愚かで、馬鹿で、どうしようもない。

何もかもを手に入れたはずなのに、何ももっていない私なんかを欲しがる。

ならば愚かな者同士、私と男は似合いなのかもしれない。  
お互いしか、見えていないし、求めているのだから。

## 愚か（後書き）

作者の好みてんこ盛りの習作でした。  
ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9150u/>

---

月の水

2011年7月25日03時09分発行